

清・趙之謙 ちやうしけん
《沈均初宛尺牘》 しんいんしよあてせきとく

一九五七年に老舎 らうしや が執筆した三幕話劇《茶館》の映画化作品を見た。王利発なる人物が経営する北京の老舗茶館「裕泰茶館」を舞台に、清朝末期から抗日戦争直後までの社会の変貌と、そこに生きる市井の人々の哀しみを凝視した作品である。初めの三十分ほどは清朝が崩壊する直前の茶館内の様子で、この第一幕にあたる導入部分が特に興味深かった。

壁に貼られた「莫談国事（国のことを話すのは禁物）」の四字を無視して「清はまもなく滅びるだろう」と本音を口走り、憲官らしき二人に連れ去られる知識人、貧民の若い娘を仲買人から直接買い取る宦官の老官僚、いずれはここに工場を建てようと息巻く実業資本家、食べ物ねだる飢えた乞食の母と子……。この老舗の茶館の中で繰り広げられる人間模様は、当時の末期的社会状況の縮図でもある。

辮髪 べんぱつ を長々と垂れた映画の中の知識人たちの様子を見ているうちに連想されたのは、清末の能書家や金石学者たちのことである。北京にあつて活動した清末の能書家や金石学者たち、それは官僚であつたり、科挙の受験準備のために上京している人たちであつた。

彼らは時にこの種の茶館の客となつて、国事は語らずとも、金石や書画や骨董の話に花を咲かせていたはずである。あの琉璃廠 リウリーチャン 界隈の茶館ともなれば、手に入れたばかりの古碑帖や骨董品を見ながらの賑やかな会話がはずんでいたことだろう。

佛舍龍甚美好工值幾何既不
 代結明歲再淑還也今日釣到研已
 過半矣無客來明晚當畢工矣浦
 光祿招飲臨期暫回往河如反清
 日安弟謹上
 切初仁兄同年

のべ五回にわたって、三年に一度の会試を受験するために北京での生活を送った趙之謙（一八二
 九（一八八四）。彼は咸豐九年（一八五九）三十一歳の秋、第三位という好成績をもって杭州で行わ

れた郷試に合格し、举人の資格を得た。紹興の出身者であることからすれば、北京に来るたびに、おそらくは琉璃廠の南西一キロ余りにあった山会邑館（紹興会館）に宿泊していた。

そして、足しげく琉璃廠に通い、はしご酒をするように碑帖舖などを渡り歩き、行きつけの茶館の客となり、同好の士の間に分け入って意気盛んに紹興弁でまくし立てていたに違いない。役人たちが使っていたはずの北京官話など学んだ経験もなく、どれだけ会話が成り立っていたかは不明である。

五回にわたる趙之謙の北京での生活のうち、滞在がもっとも長かったのは最初の入都、すなわち同治元年（一八六二）の暮から同治四年にかけての時で、正味三年間をこの地で過ごしている。この間、政界の実力者潘祖蔭（二八三〇～一八九〇）の庇護のもと、沈均初や魏稼孫といった同好の親友と交わりを結んだ。ここに掲げたのは、当時の一筆と推定される沈均初宛の尺牘である（清雅堂『悲庵手札（趙之謙尺牘）』より）。

「仏龕は甚だ美好、工値は幾何ならん。既に代給を承くも、明歳再び繳還する也。今日、劉碑を鉤すること、已に半ばを過ぐ。若し客の来ること無くば、明晩当に工を畢るべし。潘光祿、飲に招く。期に臨んで共に往くことを約すは何如。復た日安を請う。弟謙頓首。均初仁兄同年。」

酒宴に招いた「潘光祿」というのは潘祖蔭のこと。その時はいっしょに行こうと沈均初を誘っている。沈均初宛の尺牘の中には、他にも、今日の琉璃廠は人でごったがえしていたが、特にめばし

いものはなかった、それでも露店には印材のよいのがあった、といった内容のものもある。当時の様子を彷彿とさせ、興味が尽きない。

沈均初、すなわち沈樹鏞（しんじゅよう）（一八三二～一八七三）は、字を均初（いんしゅ）といい、鄭斎（ていさい）と号した。今の上海市の東南部、江蘇省川沙（せんさ）の富豪の家に生まれた。咸豐九年（一八五九）の恩科の郷試に合格して挙人となったが、趙之謙と同じく進士には及第できずに終わっている。北京では一時期、宮中の文書を掌る内閣中書の職についた。内閣中書は在京官ながら、清代における官吏の位階「九品十八級」では「従七品」に属し、官位としては地方官の県令よりもひくい。著述に宋代以来の自蔵の書画についての品評集『書画心賞日録』がある。近代有数の古書画の收藏家・鑑定家・呉湖帆（ごこはん）（一八九四～一九六八）は彼の孫にあたる。

手足を伸ばして波にたゆたうような筆法である。これは三十代の一筆で、のちには日常の書信ですら、北魏書風の雄強の度を加えた行草体で書くようになった。